



牛たちの知られざる生活

Rosamund Young 著 石崎比呂美 訳

ISBN 978-4-908251-08-5

アダチプレス 1,600円(税別)

本書「牛たちの知られざる生活」は、著者の自身の牧場での経験を基にした、家畜の生活や行動・動作に関する、とてもチャーミングな体験や考察がつつられている。本書は当初(2003年)、農業関連の出版社から出されたことから、家畜のことを知る人を読者として想定していたことが推察される。本書を読んでみても、ある程度の家畜に関する知識があると、とても楽しめる本であることが感じられる。もちろん知識がなくとも、家畜たちの生活を知るのには、とても良い本である。単に「牛の生活を垣間見た」に終わらず、畜産現場の知恵が、いかに科学に基づいているかを、是非、本書を読みながら、畜産を学ぶことで理解してほしい。

本書は章立てになっていない。しかし、大きく3つのパートに分かれる。一つ目は、「はじめに」として綴られている。本書の概説と、現代畜産に対する警鐘を述べた部分である。この部分は、わずか22ページと分量としては少ないが、現在、畜産現場に起こっている生産手段変革の意図がよく記述されている。畜産に対する知識を少し持てば、正しく理解できる部分でもある。何度か読み込み、関連資料をきちんと調べることで、理解はさらに深まるという意味で良質の教材でもある。

第2の内容は、さまざまなエピソードを紹介する部分である。ほとんどのエピソードは5ページ以下で書かれており、長くても10ページを超えるものはない。一つ一つに必ずしも連続性はないので、各

エピソードの表題を目次で見たり、本書のページをバラバラと繰ったりしながら読むこともできる。まるでロレンツ博士の「ソロモンの指輪」のような、エピソードごとに面白さが詰まった記述である。自由な方法で、行ったり来たりしながら読むのが良いが、記述内容に従い牛の家系図を作ると牧場の歴史も含め理解が深まる。また、記述中の興味深い部分を書き出し、その意味(科学的根拠)を調べることで、これまでの家畜管理分野における研究成果の現場応用への再確認がなされる。たとえば、各エピソードには「睡眠時の姿勢」、「発声する場面」、「寒冷環境への適用」あるいは「分娩直後の採食量低下」、「子牛の遊戯行動」、「毛づくろいの大切さ」、「動物にとって何が良いかを決めるのは動物自身」に関する記述が含まれていて、とても興味深い。

第3部分は、末尾に記載された「牛について知っておくべき20のこと」である。鶏、羊および豚についても20ずつ書かれていて、いずれも1ページ程度の、箇条書き的な書き方である。この部分からだけでも、いかに家畜が愛らしく、配慮すべき、パートナーなのかということが判る。身近に英語での原本があれば、それも確認されることをお勧めする。日本語出版本のサイズや厚さ、表紙の硬さや紙の質などを総合して、持ち歩きたくするような本となっている。英語版も同様の装丁であり、日本語版の横に置き、興味ある部分について確認する有効な参考書としての利用をおすすめする。

本書の前書きや挿入画もとても良質であり、第4の構成項目と言っても過言ではない。特に、目次直後のシェイクスピアの引用文「自然は動物たちに誰が友であるかを教えてくれる」には、「わくわく、どきどき」を強く感じるころがあった。本書全編を通じた、著者の意志は、この言葉に込められているのだろう。

(酪農学園大学 家畜管理・行動学 森田 茂)